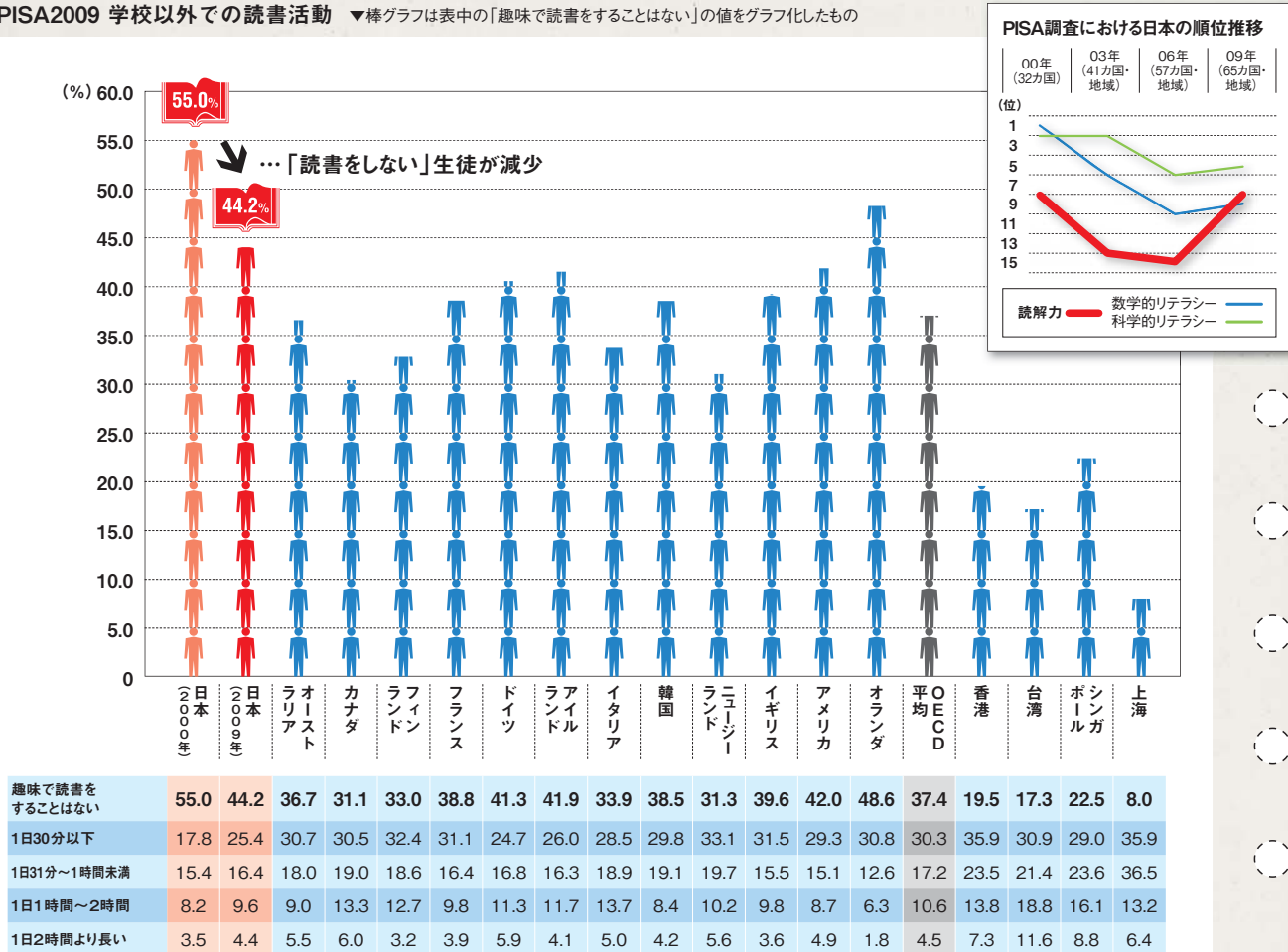


Data Clip

読解力アップの背景に読書活動の広がり？

世界各国の15歳(高校1年生)を対象に、「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」の3分野について3年ごとに調査するOECD生徒の学習到達度調査(PISA)。2009年調査で日本は「読解力」が前回より大幅にアップした。その背景にあるものは？

●PISA2009 学校以外での読書活動 ▼棒グラフは表中の「趣味で読書をすることはない」の値をグラフ化したもの



出典：国立教育政策研究所編『生きるための知識と技能』（ぎょうせい／2002年）P.82、『生きるための知識と技能4』（明石書店／2010年）P.xi～xxivおよびP.98より作成

本を読む人は増えたが
世界レベルではまだ低水準

PISA2009の日本の結果で目立つのは、「読解力」スコアの回復だ。平均得点が前回の498点から520点へと上昇し、参加国中の順位も15位から8位に上がった（ネット）。また、テストと同時に行われた生徒アンケートでは、「趣味で読書をする」との回答が前回（00年）から11ポイント減少。「PISA2003以来、国をあげて取り組んできた、読書や言語活動の充実に関するさまざまな試みが実を結んだのでは」と、国立教育政策研究所総括研究官の藤田晃之氏は現場の努力を讃える。

しかし、他国と比べると、日本の「趣味で読書をする」という回答は依然として多い。別の質問で、「伝記やルポルタージュ」「新聞」をすすんで読む生徒がOECD平均より少ないのも気になる（ネット）。今回の調査結果は現在、研究者の間で詳細な分析が進められているが、上位グループにある日本のテスト結果は、読書への興味や関心に支えられた数字ではない可能性がある。「子どもたちに文字文化に興味を持たせるには、授業での本や新聞などの活用はもちろん、先生ご自身と好きな本との出会いやエピソードを伝えるなど、読む楽しさを共有することが有効なのではないか」と、藤田氏は期待を寄せている。